



兕玉譽士夫著作選集

風雲

上
卷

児玉誉士夫著作選集

風 雲 上 卷

定価 八・上・中・下 全三巻 九千円

送料 六百元

昭和四十七年十二月一日発行

著 者 児 玉 誉 士 夫

編 集 者 栗 原 一 夫

発 行 者 西 山 幸 輝

発 行 所 株式 会社 日本及日本人社

東京都中央区京橋二丁目十一 マスダビル

電話 代表 (五六三) 一八一 一番

振 替 (東京) 八 九 七 一 六 番

<検印省略>

印刷・製本／日美印刷工芸株式会社

児玉譽士夫小論

第一章

林 孝雄

(林 房雄)

児玉譽士夫を知って早くも三十年が過ぎた。互いに仕事の間を異にしているので、会い語る機会は少なかったが、目に見えぬ心の糸はつながっていた。その糸の最も強いものの一つは、この不思議な人物がときどき発表する自伝風の著書である。

巻数は少なかったが記された文字のすべてが、強く私の胸を打った。私も長く文字の道にたずさわっている者の一人だから、文章の真贋だけはわかるつもりだ。この人は嘘の言えない人、嘘を行えない人である。爆発する激情のみに身をまかせて生きてきた行動家であるかのような印象を、世間の一部の人々は持っているかもしれないが、そんな単純な人物ではない。深い内省と謙虚を内に蔵している。生れながらの叛骨と権力者嫌いは生涯消えることはないであろうが、あふれる温情を胸底に秘めて、人情の正道を歩き通した。肩をいからした国士面と強面こつめの

愛国者顔のきらいな、永遠の愛国者。常に迅速、果敢な行動によって裏つけられる適確無比の洞察力と決断力は、これまた天与のものであろう。ある公開の席上で、私は彼を「天才」と呼んだことがあるが、決してお世辞ではなかった。彼の著書を読み、人柄を眺めることによって、次第に私の中に熟して来た児玉誉士夫理解が言わせた自然な発言であった。

＊

ある時、私の娘と同級的女子学生が、『芝草はふまれても』を持って行って読み、「こんな面白い本、近ごろ読んだことがない」と言った。「どこがどう面白かったのだ」とたずねたら、「どうって言えないけれど、つまり全体が面白かったの。この人、ただの右翼ではないのね。ほかの本も借してよ、友達にも読ませたいから」と答えた。

彼女は素直な「平均的日本人」の一人であるから、「右翼」にも「左翼」にも同等の嫌悪感と恐怖感を持っていることを、日ごろからかくさなかった。それが、『芝草』を面白いと言い、私の書架から『獄中獄外』『われ敗れたり』『回想録』を持って行き、友達にも読ませている。

彼女が「つまり全体が面白かった」と言い、「ただの右翼ではないのね」と言った理由は、私にはわかるような気がする。児玉誉士夫の著書は、多くの日本人を食傷させている「ぎまり文句の愛国書」からは、はるかに遠い。いわゆる絶叫型でも説教型でもない。こんなことまで書いていいのかと思えるほど、何事もかくさない。気取った無用な理論はふりまわさず、攻撃の鋭鋒は現支配層の腐敗面に集中されて、ただ真実のみを述べる。彼の怒りの源泉は困苦する国民大衆へのあふれる同情である。

この変らぬ姿勢の中から、おのずから、人間の正道、日本人の歩くべき一筋の白道が私どもの眼前に輝き出る。

外国人の著作を持ち出すこともないのだが、『われ敗れたり』は英国人モズレーの『天皇ヒロヒト』の中に、最も正直で勇氣ある日本人の証言として、数箇所引用されている。十月事件の幹部軍人の行状を「無知のごろつきの群れがやる、氣違いじみた酒色の底抜け騒ぎ」と評し、また戦争中の上海における高級軍人の腐敗ぶりと戦災民の悲惨を描いた部分を引いて、モズレーは「彼らのような人たち、少なくとも軍に対して抗議する勇氣のある者は多くなかった」と書いている。児玉譽士夫は二十代の維新青年として世に立って以来、勇氣ある抗議者、数少ない眞の愛国者の姿勢を貫き通している。

＊

児玉譽士夫は酒を飲まない。飲めないのではなく、飲まない。

まだつきあいの浅かったころは、これは体質的なもので、即ち「下戸」なのだろうと思っていた。私の方は親譲りの「上戸」で、豪酒というよりも暴酒というべき、浴びるような飲み方をして、乱に及ぶことしばしばであった。見兼ねたのであろう、彼は時折り私に言った。

「あんたは酒をつつしみなさい。わたしは、このとおり飲まぬ」

その言葉の意味がわかったのは、だいたい後になって、彼自身の口から次のような告白を聞いた時であった。

若いころには、人並みには飲み、飲めばいい御機嫌にもなり、つきあいとなれば酒場の梯子も辞さなかった。

ある晩、酒場のカウンターで友人たちとグラスを片手に放談し、さて帰ろうとして気がつくと、上着の背が鋭い

刃物で縦一文字に切り裂かれていた。

「これはいけない」と思ったそうだ。「生死の覚悟というような問題ではない。酒場で酔って刺されるなどは男の名譽ではないし、しかも、刺されたのならまだしも、背中に刃物を当てられて、それに気がつかなかったというのは醜態以外何物でもない。こんな飲み方と酔い方はやめよう」

以来、飲めないのではなく、飲まない、兎玉譽士夫が生れた。「意志の人」だなどとお座なりな褒め方をするつもりはない。彼の言動には体験と反省の裏づけがある。この二つのものを大切にして生きてきた人だ。

彼は私に言ってくれた。

「あんたは大事な人だ。酒に殺されてはならぬ。わたしもつつしんでいる」

空な説教ではなかった。だが、その言葉を聞いても、なお私は酒をやめられなかった。酒席で自ら盃を伏せるようになったのは、六十歳を過ぎて衰えた健康がさせた業であった。つい最近のこと、二人きりで会った時、彼はブランデーの封を切って、

「今日はすこし飲みましょう。わたしも飲む。ここは酒場ではないし」

私は頭をかいいた。

「飲みましょう。だが、もうあんたより弱いかもしれぬ。あんたほどの反省力と決断力は、酒についても、わたしにはなかった」

＊

彼はよく物事を眺め、見つめる。彼の『回想録』と『自伝』の深々たる妙味と興味は、そこから生れる。専門

の文筆家ではないから、文章の肌は一見粗いように見えるが、觀察の適確と鋭い直観は、敢えて文学的と言っても過褒にならぬ。

『芝草』はふまれても』の巢鴨戦犯收容所生活の活写は、文献としても比類がない。少なくとも私は、これほど正確で鋭い戦犯文献を他に見たことがない。ただの記録ではない。登場するA級からC級に至る戦犯諸氏の姿がそれぞれ個性をもって生々と描き出されている。表情まで見えるようだ。しかも、底をつらぬいているものは、戦争裁判の偽善性に対する公然たる批判抗議であり、無辜にして刑せられる人々への深い同情であり、日本人の魂の底から発する烈々たる怒りである。

『芝草』の後半は日記であって、昭和二十一年一月二十五日、巢鴨收容の日から始まり、それに前篇の獄中記が書き加えられて、出版は三十一年正月になっている。私の『大東亜戦争肯定論』上巻が出たのは三十九年八月で、『芝草』よりも八年以上おくられている。『肯定論』の眼目は東京裁判に対する抗議であるが、同じ抗議がそれよりも約十八年前に『A級戦犯容疑者』兎玉營士夫によって提出されていたことに改めて驚いた。

著者自身の序文に曰く、

「戦争裁判による戦犯——占領行政、これら一連の国際的事犯は、世界のいかなる学者がこれを合理化しようとも、完全勝者による完全敗者への報復である。復仇手段である。一方が完勝であり、一方が完敗でない場合には戦争裁判はなく、戦犯はない。また占領行政もない」

「西ドイツでは、嘗てその戦犯が連合国軍から指定され、処刑されると伝えられるや、ドイツ国民は大学して刑務所前に一大デモ行進をおこし、戦犯は必しも処罰されるその人達ではない、彼らは民族の開運を信じてその先達となり戦った人たちでむしろ尊い犠牲者である——として彼等の立場を擁護し、民族の英雄を大死させては

ならないと宣言した」

「ところが、日本国民のある者は、戦争は一部の指導者が煽動し挑発したものであると国民を煽動し、戦犯者を国賊扱いにし、その住居には投石してうつぶんを晴らすという態度を示してきた。かつて戦争行為の波に乗って指導的立場をとった人達までが俄かに左旋回して左翼的、思想政党的の指導者に鞍がえしたのである」

『民族の矜持は断じて失うべからず』がこの序文の結語である。

「一、敗戦における歴史の教訓を骨髓に徹して再吟味し、過去十年の立遅れ——世界の進歩への立遅れをとり戻さなくてはならない。

二、その根底は民族の矜持である。徒らに劣等意識に陥るの愚はもとより、歴史に照応して民族は滅びない、八千万同胞は必ずやこの国土に自存の途を発見し、さらに広く海外に向って駿足を伸ばし得る民族であるとの自信を固めることである。

三、国民同士の相剋摩擦を排することは、その一であり、国の目標——独立国家としての姿態を充実させることはその二である。さらに他力依存的存在から脱却し、独立自存に徹して共存の社会体制を確立してゆくこと、その三である」

＊

これが児玉誉士夫の思想と心情をつらぬく主調音であるが、『回想録』も『日記』も、いわゆる国士風の慷慨調や絶叫になっていないのは、彼が常に事実在即して物を眺め、是を是とし非を非とする心の習慣を身につけているからだ。

『日記』にはアメリカ人の長所を長所として認める句章がしばしば出てくる。この内省から生れる客観能力は天与のものか修業によるものか、おそらく両者によるものであらう。

彼の獄中生活は、府中刑務所から巢鴨収容所に至るまで、容易ならぬ長さであった。その間、実によく読書している。独房に入れられれば誰でも読書すると思うのはまちがいである。活字を見ただけで頭が痛くなるという者もある。好学の心ある者だけが、孤独に堪え、孤独を逆利用して書物に親しむ。

府中刑務所で書籍係を命じられた時の喜びようは、日記の文字には直接現れていないが、ひとしおのものであったと察しられる。『獄中獄外』によれば

「刑務所では、少くとも一年に（当時の金で）千五百円の新本を三度に分けて買いこむから、中には読みたい本も沢山ある。書庫の中は、宗教、文学、辞典、經典、工業、修業、物理、地歴、哲学、算数、化学、読本、伝記等に分れており、……ともかく四万冊もあるのだから、中には随分古い本もある。そして古い本の中には、新本には見られぬ良い本が相当ある」

「まあ、自分はこの機会に大いに勉強するつもりだ。或る人の言に、書物は多く読むものでないとの事だが、それはその時の気持で、読みたいと思ったら矢張り大いに読むことだ」

私の居た豊多摩刑務所の書庫も、多少偏してはいたが、外では想像のできないほど完備していた。高度で大冊の宗教、哲学の名著から漱石や子規の全集までそろっていた。

兎玉譽士夫も四万冊を全部読んだわけではない。その必要もない。ただ彼は囚人労働の寸暇を惜んで読み得るかぎり、むさぼり読んだ。

後の『巢鴨日記』には一か月少なくとも二十冊は読んだと書いてあるから、府中での読書量も相当なものであ

ったにちがいない。外で読めば、一か月二冊くらいが精一杯の大著名著を、月平均二十冊も読んだとすれば、世に学者と称する者の読書量に数倍し、しかも孤独な熟読心読によって、心底におのずから蓄積される知識の層は厚い。知識と学問の本質と正体を知ると同時に、真の知識人の自信が湧いてくる。大学出のいわゆる学者の言説の前でおびえる心はおのずから消える。

児玉誉士夫を「無学の豪傑」だと思っている者は、今でも少なくなろう。とんでもない見当ちがいだ。彼が好学の少年であったことは『回想録』の初めの部分を読めばわかる。彼は夜学に通いたくて、体力にあまる重労働までしたが、薄給の少年工には、就学機会はついに恵まれなかった。これを再々度の入獄が補ってくれた。その上、満二十七歳になった昭和十三年に日本大学を卒業して、満されなかった少年の日の初心を貫いた。

話とはぶようだが、彼は少年の頃、義兄に上野公園の西郷隆盛の銅像の前につれて行かれ、「偉くなるなら、この人のような偉い人になれ」と言われたことがある。義兄にも深い意味はなく、そのころの児玉少年もまた西郷隆盛が何者であるかを知っていたわけではなからう。漠然と「偉人の典型」と感じた程度であつたろう。

その西郷隆盛を「無学の豪傑」と思っている者が、今も昔も少なくない。学識においては、大久保利通の方がはるかに上だったという通念のようなものがあることを、私は『西郷隆盛』二十二巻を書いている間に知った。

しかし、事実はこの通念の逆であつた。「大久保には学問はないが」という岩倉具視の証言も残っている。大久保は漢詩もつくったから無学とは言えぬ。だが、その詩はすべて権力者の大言壮語に似て内省の陰影がないところ、西郷の漢詩とはちがう。西郷は流刑の島に八百巻の書物を持って行き、その後も死に至るまで読書の習慣を絶やさなかった。ある意味で西郷は書を読みすぎた。書を読むことの少なかった大久保は政治の技術と権力の操作に練達したが、西郷はこの型の政治家の限界を早く超脱した。権力の空しさと害悪を知り、廟堂に立つこと

を嫌い、永遠の浪士・叛逆者として世を終えた。彼の天性と同時に、凡百の政治家の真似て及ばぬ好學心と内省力が彼をこの高い境地に導いたのである。

兒玉譽士夫を西郷隆盛に比べることは、大袈裟にも聞え、本人もひどく羞かむことであろうから、ひかえておく。ただ、両者が共に「無學の豪傑」でないことだけは明記しておきたい。ついでに附加しておかねばならぬのは、「兒玉には文章は書けないはずだから、その回想録その他は誰かの代筆だろう」と私の名を挙げた男がいるが、これはとんでもない籤にらみである。彼はちゃんと文章が書ける。現にこの著作集に集められたような達意の文章を書いている。

つい最近、私はこの小論を書くために、『巢鴨日記』の原稿の一部を見たが、鉛筆書きながら、丹念な楷書で、手を入れる余地など全くない首尾整った文章であつた。司馬遼太郎は『西郷書簡集』を読んで、「ユーモアさえ、まじえた達意の文章は、現代に生かせばそのまま一流のジャーナリストのものと言いたいくらいだ」と書いている。今、著作集を通読してみても、司馬君のこの言葉がそのまま兒玉譽士夫にもあてはまるところだ。幸いに売文の業に従ふ必要がなかったので、学識はうちにひそめて磨かれぬ玉のような私記のいくつかを投げ出しただけである。風雲急な政局と戦陣の中で書かれた『西郷書簡』の数々も推敲された文章ではない。それでいながら、意は充分に達せられ、時折りさしはさむ巧まぬユーモアは読む人を思わず破顔させる。兒玉文章もそれに似ている。

＊

兒玉譽士夫を今日あらしめたものには、もちろん、その他の要因の数々がある。その最大なるものの一つは、『回想録』に現れている少年時代の暴れん坊根性である。手のつけられぬほどの腕白坊主で向う見ずで、行動的

な正義派であったことが、日本と朝鮮を股にかけた少年期の放浪の原因であったことを、彼自ら認めている。「三つ児の魂百まで」という古いことわざは、最近の性格心理学で新しく見なおされている。人間の核性格（コア・パーソナリティ）は三歳あたりまでで決まるそうだ。即ち、幼年期少年期の性格は生涯変らない。教育と修養は多少の磨き砂の役割を果すが、個人の根本性格を変えることはできない。それが人間の運命をつくる。

『獄中獄外』と『巢鴨日記』のあいだには、約十七年の歳月があるが、両者を比べて読んで「やっぱり児玉は児玉だなあ」という感を深くする者は私一人ではなからう。昭和二十年のA級戦犯容疑者としての彼を「暴れん坊」と呼ぶことはできない。年齢と経験によるおのずからな成熟がある。しかし、その根本性格——直情径行の正義派の根性とは変っていない。それでいいのだ。引用と説明はやめて、この点の判断は読者におまかせする。

この根性は彼の生得のものであるが、生得とは何か、血統の問題である。祖先の家柄や位階勲等などはどうでもいい。これらは児玉誉士夫が毛虫のように嫌っているものだ。しかし、彼が武士の子であることだけは書きおとすことができない。

「わたしの先祖は、代々二本松藩で槍術の指南役をつとめていた。そして累代、山田兵蔵を名乗ったが、祖父の時に兵太夫と改名した。

わたしの父は酋四郎といい、わかい時分に同じ二本松藩の御典医・児玉家から望まれて養子となった。父は養家の業をつぐために、仙台におもむいて医学の勉強をした。その学友のなかには後年りっぱな政治家となった後藤新平さんもいた」

当時は板垣自由党の草創期であった。

「わたしの父は、これもまたいつのまにか医業をすてて、政界に身を投じていた。明治新政府に対する不平不満の声は、東北地方ばかりか、燎原の火のごとく全国的にひろがって行った」

「そのころの政治家は、後年『井戸べい』と言われたように、おおむね清貧に甘んじる気骨があり、いわゆる国士的な風格をそなえている人物が少なくなかった。であるだけに、政治に深入りすればするほど、私財を散じ、家産を傾けつくす者もめずらしくなかった。父のばあいも同様で、わたしがいくら物心のついた時分には、もう家産らしいものは何一つ残っていなかったようである」（『回想録』）

この清貧の父が息子に残したものは、釣好きの癖のほかには、維新敗戦の側に立った二本松藩士の意地と、初期自由黨員の国士的反骨だけであった。これは男の子にとっては財産以上の貴重な遺産である。と同時に、厄介な苦勞の種である。

果して郷里から一家と共に東京に出て来た兄玉譽士夫の少年時代は苦勞の連続であった。

＊

大正十五年、彼は十五歳であった。兄玉家は一家離散状態にあり、少年の彼は朝鮮京城の姉を頼って海を渡ったが、その家にも落つけず、神戸の次兄のもとにひきかえし、旅費十円をもらって東京の長兄の家にたどりついて、向島の小さな鉄工所で日給一円二十銭の見習工として働きはじめた。

不況と米騒動の時代であった。ストライキと小作争議が続発し、左翼の活動は活潑となりつつあったが、政府も財閥も反省の色はなく、弾圧と酷使が公然と行われていた。

「かくいうわたしもまた、もちろん被搾取の側にたつ微力な労働者の一人だった。……長い一日をくたくたに

なるまで働かされて、なお、手に入る賃銀はわずかに一円二十銭なのである。職場にはもとより、なんの厚生施設も福利機関もできておらず、……われわれは、巨大な機械のなかの極小部分というよりは、使えなくなれば、ゴミ箱の中へポイとほうりこまれるべき哀れな消耗品にすぎなかった」

一日の作業を終え、ペコペコの空き腹がかえて渡る白鬚橋の橋ぎわには、子供の手のひらほどもある大福モチを売る屋台がならんでいた。

「（どうにかなったら、あの大福を腹いっぱい食べてみたいなあ）それがわたしの、せめてもの念願であった。しかし、現実には、とうていみたされずはなかった」（『回想録』）

こんな生活が昭和三年までつづく。児玉少年はせめて夜学にでも通いたいと思ひ立ち、工場の仕事のほかに鉄管配達の夜業をひきうける。五、六十貫にあまる鉄管を大八車に乗せ、夜の町を二里も三里もはこぶ。坂の途中で梶棒がはねあがってアゴをたたかれ、車いっしょにトンボがえりをうったこともある。しかも、手に入る賃銀はわずか四十銭。配達を終わって寄宿舎に帰ってくるのは夜明けになる。重労働だから腹がへる。ひと晩に一ぱい十銭の支那そばを平均二つくらいは平らげる。手にのこるのは二十銭で、一か月ぶっとおしで働いても、五円のこととはむずかしい。

「当時すでに、われわれの職場でも小単位の労働組合ができていた。最下級の見習工のわたしもまた一組合員として加入していたのである。じぶんたちの立場がみじめであればあるほど、そして労使の均衡があまりにも不釣合であることを知りつくしているわたしだけに、労働組合の結成は賛成こそすれ、もちろんこれに反対するものではなかった」

工場の行きかえりの道の両側には、「どぎつい太文字でかかれた左翼と右翼のアジビラが無数にベタベタとは

ってあった。それはまるで左右の両翼がわたしに向っておいでおいでをしているように、鮮烈に感じられた」

少年工の煩悶がはじまる。左すべきか、右すべきか。労働者である以上は、左へ行くのがまず常道である。だが、何物かが児玉少年をひきとめた。その何物かの正体を少年が意識していたとは言えない。しいて解釈すれば、それは彼の血の中にある「武士の子の魂」「日本人の心」であったと私は見る。左翼運動に多くの共感点を持ちながらも、どうしても納得できず、批判的にならざるを得ない一点があった。

「争議の場合など、なぜ赤旗を掲げ、『われらの祖国ソビエト』という奇怪なスローガンを使わねばならぬのか——これがわたしにはどうしてもふしぎでならない。われわれ日本人の祖国は、もちろんソビエトでもなければ他の外国でもないはずだ」

「起て万国の労働者……という歌声には胸の血の高鳴りをおぼえるが、高く立て、赤旗を、その下に誓死せん……の革命歌には、どうしても共鳴できず、むしろ強い反撥を感じる」

これは日本人の血の反撥である。当時、大量の労働者と知識階級が左翼に走った。私も大学生として左に走った一人である。だが、後に転向した。日本における大量転向は世界革命史に類のないものと言われているが、その原因は転向者の弱志や弾圧への恐怖のみでは説明できない。

私は当時の共産党員浅野晃君との対談で、「君や水野成夫の転向の動機はどこにあったのか」と尋ねたことがある。浅野君は「要するにコミンテルンから抜けて、モスクワの指令で動くのをやめること、日本独自の共産党で行こうと考えたので、厳密に転向とは言えない」と答えた。しかし、結果は日共主流と対立し、やがて脱党転向して、浅野君は愛国詩人として、水野君は前衛的財界人として、それぞれ己れを完成した。

コミンテルンから脱退し、ロシア共産党の支配から独立しなければならぬと直感したのは、彼らの「日本人の

血」が機能したのだ。

後にトロツキイの曝露によって判明したことだが、当時のロシア共産党は各国共産党（コミンテルン支部）をソ連の国境防備隊としか考えていなかった。「ソ連はプロレタリアの祖国」というスローガンは、マルクスの著書からは絶対にひき出されない。にもかかわらず、ソ連は各国共産党をロシアの国境防備隊または第五列として利用しただけで、例えば日本の共産党がいかに大量犠牲者を出そうが、つぶれてしまおうが平気で、ただ命令するだけであった。それを見抜いた共産党の中の敏感な部分が独立の口火を切り、やがて後の大量転向を導いた。

児玉少年はこの型の転向者達より、さらに敏感であり正直であったと言える。左せんか右せんかと迷いぬいた末に、岐れ道に立ち止まって、自ら右への道を選んだ。少年は右に述べたような裏面の事情を知っていたわけではない。おのれの直感に従って、共産党のソ連製スローガンの代りに、おのれの血の命令に従ったのだ。彼は現象の背後を見る目を生れながらに恵まれていた。事実を見つめることによってスローガンや観念の虚偽を見抜く哲学的能力をそなえていた。

この選択は正しかった。しかも、「右への道」は「左への道」におとらぬ数々の苦難にみちていた。昭和四年、十八歳の児玉少年が選んだ「右翼」は当時の「大日本正義団」や「赤化防止団」型の支配層とかかわりの深すぎる、反共専門の既成右翼団体ではなかった。東大教授上杉慎吉博士、元東京市長永田秀次郎、国家社会主義者津久井竜雄、赤尾敏氏などによって主唱創立された「建国会」であり、この団体は児玉青年の目には「非常に進歩的な考えをもった人々の集り」のように見えた。

「当時のほとんどの右翼団体が、左翼に対する攻撃のみに終始していたにもかかわらず、金権政治あるいは資本主義の横暴に反撥し抵抗したということは、公平にみて革新的であり、……赤旗によらずして、金権政治や悪